発掘 文学の宝

今月の「文学の宝」でご紹介するのは、九州大学臨界実験所の初代所長の大島廣さんです。研究所の開設経緯や天皇陛下御行幸の際の逸話など苓北町の歴史も知ることができます。

企画／ドットワークス　下川嘉奈

大島（おおしま）　廣（ひろし）

1885年11月5日-1971年3月6日、大分県大分市出身。

第五高等学校教授、九州帝国大学教授（一時東京帝大兼任）、天草臨海実験所長を経て退官後近江兄弟社学園講師を務めた。帝国学士院会員、動物分類学会会長。

生誕140年

九州大学臨海研究所の初代所長

宮﨑　國忠

ことしは昭和百年にあたる年という。歴史を振り返り百年の間に起きたさまざまな事柄が思い起こされるとともに、喜び悲しみに付け祖父母が、また私たちが積み重ねた年輪に思いを致す機会となっている。苓北町でもこの百年の間に起きた出来事も多い。

昭和三十、三十一年に一町三村が苓北町として合併出発してからもちょうど七十年。古稀のお祝いする年にあたるのもその一つといえる。

さらに、昭和二十四年合併以前の富岡に昭和天皇が行幸されたことも大きな出来事であった。終戦の年（昭和二十年）七月に生まれた私は、当時四才。戦後の困難期、関西在住であったためこの事は知らない。当時富岡小学校でお迎えした人達の多くが鬼籍（きせき）に入れられた時代となった。

大戦後の日本全国に復興を願い国民を激励して回られる天皇行幸の中でも特にわが町が誇っていいのは、生物学御研究の学者としても称えられる昭和天皇が、九大の臨海実験所にお立ち寄りになられたこと、ことに綿密なスケジュールが組まれている中、「当日朝、下田の宿を三十分も早くお立ちになられ、実験所でも時間が過ぎるのも構わずに滞在された」とそのご熱心を当時の入江侍従長が書き残している。前夜にやっと所員が採取したという、ウミウシの中でも最も美しいといわれる「ハナデンシャ」の前で詳しく採取のことをお尋ねになるなど、造詣の深さにそばで説明する所長がかえって恥ずかしいくらいであったと述懐している。

そもそもなぜ富岡に、またどうしてここに九大が実験所をおいたのか？そこには、初代所長（昭和三年開設）の大島廣が係わっている。大島は明治四十二年東京帝国大学理科大学動物学科卒業、熊本の五高教師を経て欧米留学のあと九州大学の教授となる。

大島は外遊中、当時次々に建設されていた国内の臨海実験所を視察するごとにその重要性を知り自らの所属の実験所建設にあたるのである。海の生物が豊かで多様、大学の研究室との交通の便、建設地の環境などを立地条件として、福岡の「津屋崎」・長崎の野茂崎半島突端「脇岬」・天草の「牛深」ほかなどの候補地を退け最終的に富岡に決定した。

富岡は干満の差が大きくまた有明海と外海の天草灘を出入りする海水は最高で六ノット以上になり、その急流や遠浅の海岸砂地岩礁泥地などの物相は実に豊富であった。さらに当時の富岡町から寄贈を申し出られた土地は約二万坪で、ほかの候補地を圧倒していた。その内訳は、私たちが曲崎と呼ぶ陸繋島のすべて一万六千坪と富岡城の三の丸城跡付近三千坪という破格の条件であった。

この計画が正式決定したのが、昭和百年の始まる年・大正十五年のことであった。この時から研究棟などの建設が開始され、公式に登録されるような水族館を附設した研究所が昭和三年に発足を見るのである。

（つづく）